

社会委員会通信

No. 52

2016. 8. 14

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel : 045-833-5323 Fax : 045-833-6616

2016年8月7日(日)の平和聖日は、桜本教会伝道師並びに田園調布学園大学教授でいらっしやいます鈴木文治先生に、「戦時下にある」、「神様との関係における命の重さ」及び「障害(者)とは何か」を背景に、『教会とインクルージョン』と題して、講演して頂きました。

鈴木先生は桜本教会伝道師としてのホームレス支援活動とともに、中学校の特別支援学級の教師を始まりとして永年にわたり障害者教育にも携わっておられ、まさに実践に基づいた講演でありました。

インクルージョンとは、様々なニーズのある人々を包み込み、支えあう社会のあり方を指すものであり、インクルーシブ教育は子どもの個別ニーズに合わせた愛情豊かな教育を目指し、一人ひとりの違いを祝福し歓迎する価値観に基づいています。健常者と障害者の間に境界線はなく、“人は全て障害者である”という先生のことばが強く胸に残っています。

このようなインクルージョンの考えを教会はどのように生かし実践していくのかを、横浜港南台教会も問われていると思います。

参加者は52名(男性12名、女性40名)でした。参加者の皆様、ありがとうございました。

(社会委員長：J・K)



桜本教会伝道師
田園調布学園大学教授

鈴木 文治

はじめに

皆さん、こんにちは。今、紹介していただいた鈴木です。礼拝とはちょっと変わりましたので、リラックスしてお話させていただこうと思っております。

はじめに、相模原の津久井やまゆり園の障害者殺傷事件についてお話したいと思います。私は大学の教員をしております関係で、いろいろなところで呼ばれてお話をするのですが、必ずこの話をします。あの事件は私たちに何を突き付けているのかと。障害者はいらないとか、障害者なんか死んだ方がよいと思う人は、恐らく世の中に大勢いると思う

んです。だけど、それは口に出してはいけないという社会的な状況はありますよね。あるいは、やっちはいけないというストップがかかると思うんです。それなのに今回あのような事件が起こったということは、それをさせてもよい社会的な状況がどこかにあるんじゃないかと私は思うんです。

ドイツは、ワイマール憲法という基本的な人権を初めて謳った憲法を作ったにも拘らず、それをないがしろにしてナチスが台頭して、とうとうああいう国を作ってしまった。最初に起こったのは、障害者の抹殺です。障害者の方たち約20万人が命を奪われ、

それから不妊手術をして、子どもが産めない体になりました。あのあと起こっていったのが、いわゆるユダヤ人 600 万人の虐殺です。そういうことは、我々もよく知っているのですが、実際もっといろんなことがあったということが、今日になって分かってきました。例えば、同性愛を犯罪と見なして、同性愛者を処罰する。こういうことも現実の問題としてありました。社会全体が弱い立場にある人たちを排除したり、抹殺してもよいという考え方の中で突き進んだのが、あのナチスドイツということになります。

私は今の日本にそれに非常に近いものを感じています。憲法を勝手にいじくって変えてゆく。戦争のできる国にする。それからヘイトスピーチ。私は桜本というところにおりますけれども、桜本にいる多くの在日韓国・朝鮮人の人たちに対するいやがらせですね。あるいは生活保護を受けている人たちに対するバッシングの問題。こういうものを考えた時、社会全体が排除だとか非寛容、その先は抹殺ですけれども、そういうことに向かっていくのではないか。だから、今の日本も戦時下にある。私はそういう危機感を持っております。そのことを指し示してくれたのが、あの事件だったのではないかという気がします。

あの事件で知らされた 2 つ目のことは、命の重さということです。障害者の団体が、いろいろところで、障害者の人権を無視するものだと主張されておりますけれども、私たちは神を信じている人間ですから、命は誰のものかということですよ。その時点に立った時に、恐らくそういう人権団体の考え方とは違う考え方が私たちにはあるだろうと思います。一人ひとりの命は神様にもらったものです。障害があろうとなかろうと、どんな状況であろうと、神様からいただいたかけがえない命です。「人権」なんていう言葉を使ってしまうものだから、何か非常に法律的問題という感じになりますけれども、神様との関係で考えた時に、命がどれだけ大事なも

のなのか、それを勝手に人間がいじくってしまっているのかということです。問われているのはそこだと思うのです。

3 つ目は、私は 35 年間ずっと障害のある子どもたちの教育に関わってきました。障害って何だろうということやずっと頭に思い描きながら、子どもたちに関わってきました。

今日、インクルージョンのお話をするのですけれども、障害、あるいは障害者に対する皆さんの考え方が少し変わるといいなと思っています。障害とは何か？ 障害者とは誰か？ このことを頭の中に入れながら、私の話を聞いていただくとありがたいなあと思っております。

1 キリスト教との出会い

(1) 教会との出会い



①長野県飯田市の教会

私が教会に初めて行ったのは高校 2 年生、17 歳の夏休みでした。私は高校生になってから、いろいろな本を読むようになりました。もうじき学園紛争が始まるという頃で、大学に行った先輩たちが帰ってきて、いろいろな話を聞かせてくれました。そういう中で、哲学だとか宗教に関心を持って、たくさん本を読むようになりました。

ニーチェは「キリスト教は弱者の道德だ」、要するに、弱い者が信じるのがキリスト教だ、と言いました。一方で、マルクスは「宗教というのは社会的なアヘンである」、要するに、酔わせて現実の厳しさを直視させない、そのために宗教があるのだ、と言いました。こういう考え方を言う人たちがいる。そういう中で、でも本当にキリスト教とはどういう宗教なのかと、非常に関心を持ちました。それで教会に行くようになりました。私の生まれは長野県の飯田市で、飯田市の教会に何回か行って、そのあとすぐに東京の大学に来てしまいましたので、行きませんでした。けれども 3 年前にその教会に招かれて、説教をし、講演もしてきました。不思議な縁だなあと思

ます。そういうことで、私が最初に教会と出会ったのは、キリスト教を信じると言うよりも、キリスト教を知識の対象として求めたのだと思います。

②高校3年生 宗教的関心、哲学への目覚め

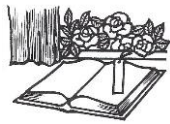
宗教に対する関心は、小さい時からありました。中学2年生の時、「将来の夢」という作文を書かされました。そこに書いたのは「お寺のお坊さんになること」。こういう話をすると、キリスト教と関係ない人から、「当たり前とも遠からず」と言われます。要するに「西洋坊主」と言われるんです。そういう意味では、子どもの頃から、宗教には非常に関心があったし、私の祖母が熱心なお寺の門徒だったので、連れて行かれたということもあって、こういうところで一生静かに暮らせたらいいいのかなあと、本当に思いました。

1つは、私が病弱だったということがあります。子どもの頃、小児結核に罹り、1年間小学校に上がるのをストップさせようかと、親は真剣に悩んだそうです。私自身もしょっちゅう熱を出したり、病院に行くものですから、自分あまり長く生きられないなあということがどこかにあったんだと思います。とにかく、宗教に非常に憧れていました。だから、お寺とか神社の持っている雰囲気はとても好きでした。

(2) 信仰への導き

①川崎教会 求道者会

私は大学1年の時、川崎教会に行きました。今の桜本教会ではなく、駅前にある川崎教会です。ここの求道者会に通っていました。ここの牧師先生から、いろんなお話を聞きました。もちろん礼拝も出ました。でも、どうしても洗礼を受ける気にはなりません。教会学校が非常に盛んでした。教会学校の先生が足りないから、早く洗礼を受けてこっちへ来てくれと言われたのですけれども、「それはできない」と拒否しました。



②桜本教会

その後、桜本教会に移りました。関田寛雄先生が初代の牧師です。関田先生が書かれた本を読んで、この方の話を聞いてみたいと思い、桜本教会に行きました。ところが、桜本教会に行ったら、関田先生は3か月前に戸手に移られて、その後に来られたのが、藤原繁子という女性の牧師でした。

桜本は川崎の中でも南部にあって、一言で言うと、ガラの悪い所です。こんなところに女性の牧師がもつかと言われて、反対があったという話も聞きましたけれども、来て教えてくれるようになりました。私は桜本教会で藤原牧師からバルトを教えられました。あのバルトによって、哲学から神学へとひっくり返ったということです。桜本教会へは、24歳くらいから行き始めて、もう40年以上行っています。一つの教会で求道者、信徒になり、神学生になり伝道師になるという過程を経ているわけで、普通の先生はいくつもの教会を経験されながら、たくさんの経験を積まれるのですけれども、私の場合は、一つだけです。今後も多分一つで終わるだろうと思います。

2 インクルージョンとの出会い

(1) 障害者との出会い

インクルージョンとはどういうことかと言うと、反対概念を考えていただきたい。インクルージョンの反対はエクスクルージョン。これは排除と訳されます。排除しない社会のあり方、排除しない教育のあり方、これがインクルージョンです。

①通常の学級の知的障害者

今、インクルージョンとの出会いということを考えてみると、障害者との出会いというのが最初です。私は1948年生まれで、戦争が終わったのは1945年です。

私の父は軍人で海軍の「長門」という戦艦に乗っておりました。「長門」という戦艦だけが生き残ったのです。唯一生き残った戦艦に

乗っておりましたから、戻って来て私が生まれたということです。私が小学校に上がったのは、戦争が終わってから 10 年近くなるのですけれども、それでも、戦争の色がありまして、戦争孤児と言われる人たちが孤児院には大勢おりました。そこから通って来ている子どもたちの中に、障害のある子がおりました。私が座っている席の隣にその子がいて、見るからに障害のある子でした。字を読んだり、書いたり、計算するということができませんでした。授業中に立ち歩いたりする子だったのですけれども、担任の先生は偉かったなあと思うんです。若い男の先生ですけれども、普通あの時代、障害のある子どもが授業中に騒いだりすると、「静かにしろ」とボコッとやったり、外に出したりしました。その先生は、一切そういうことをしませんでした。立ち歩いたりすると、静かに手を取って座らせるということをやっと繰り返してやっていました。もちろんいろんな悪さをするわけですが、でもその都度、その先生が後始末をする。私たちはそれを見て、障害者にはこういうふうに接するんだと教わった気がするのです。障害のある人たちが、特殊学級や養護学校だけに行っていたら、そういうことは起こりません。だから、インクルーシブ教育がいかに大事かということを今、身に染みて感じています。

私のクラスの先生のやった姿勢をクラスの子どもたち全員が見ている。だから、その子をいじめるなんてことはありません。ちょっかいを出したり、いろんな問題を起こします。例えば、私の弁当を食べられたことがありましたけれども、そういうことでは怒らないということです。それで、みんなで支えるという土壌が出来上がったのです。

私はいろいろなどころでお話する機会があるものですから、そのような話をします。例えば、校長会の研修会で、校長として最初にやるべきことは、その学校で一番障害の重い子どものところを毎朝行って、声をかけ、

頭を撫でて、「今日一日頑張るんだよ」と励まし声をかけることだと。そういうことをすれば、周りの先生たちも子どもたちも、全部校長のしていることを見て、同じようになる。そういう学校になれば、イジメは起こらない。実際に、障害のある子どもたちには、イジメがたくさんあります。これからそういう話をしていくのですけれども、私にとっては、あの人が本当の先生だったなあという感じがします。94 歳で亡くなりました。葬式に行って、教え子代表として私が弔辞を読みましたが、私にとっては、あの方はすばらしい先生でした。そういう目標となる先生がいたということは、非常に幸せだったと思います。



②排除しない学級

障害のある子どもたちの中で、いじめられる子どもたちが結構います。私は川崎の中学校に 15 年いました。3 年間は、普通の社会科の教師として、残りの 12 年間は、特殊学級の教師として勤めました。障害のある子どもたちが中にいると、普通学級の子どもたちにいじめられます。そこでどうやって守って行くかということが、私にとって一番大きなテーマになっていたような気がします。特に、排除しない学級ということですので、特殊学級は障害のある子どもたちだけが入っているわけではありません。障害がなくても不登校であったり、人と上手く関われなかったり、親が虐待をすとか、私のいたところでは捨て子の子がいました。捨て子の子というのは、親がいなくて捨て子になって、乳児院に預けられた。その子はやがて中学生になり、私がいた中学に来たわけですけれども、周りとうまく馴染めない。この子の一番の問題は何かと言うと、幸せな人が許せないことです。中学ですから、親がいつも綺麗なお弁当を作ってくれる。親がいっぱい声をかけてくれる。彼女にはそういう経験がないのです。しょっちゅうケンカをするという状況でした。中学生になって体が大きくなったのですけれども、

体が人一倍大きく、取っ組み合いのケンカをしたら、男の子に勝つくらいでした。ある日、取っ組み合いのケンカをした時、私がそこに割って入って引き離したら、彼女は逃げて行きました、私はすぐ追っかけました。彼女は屋上に出る階段のところに座っていました。私は横に座って、「こんなことしていたら、仲間はできないよ。友達できないよ」と言いました。怒るということを私はしませんけれども、そういう話をしたら、彼女が私をキッと見て、「先生に何が分かるのよ。私は捨て子だよ。要らない子として生まれて来たんだよ」と言って、ワッと泣き出しました。私の前で泣いてくれたということは、まだ救いがあると思いました。自分の中に抱え込まないで、人前で泣けるということ。そこから、いろいろな形で関わるようになって、少しずつ心の傷を癒していったということになるわけです。子どもの頃、辛い経験をしたことによって、人に辛く当たるといふことがあるのです。

非行の問題も同じです。非行する子どもたちは最初から悪いと決めてしまいますけれども、例えば昨年、川崎で中学1年生の男子が多摩川河川敷で殺された事件がありましたね。あれは、当然加害者の方がガンガン責められるといふことがあるわけですがけれども、よく見ると、加害者の一人ひとりがいろんな課題を抱えていたことが分かります。何故その事件を詳しく知っているかと言いますと、あの加害者が3人出た中学校で、私は12年間教えていたんです。今もその中学校の学校経営に関する識者ということで、呼ばれているいろいろ話をします。校長からいろんな情報を聞きます。そういう中で知らされるのは、あの加害者たちも中学の時にイジメだとか、いろいろな問題があったということです。親がフィリピン人で、非常に貧しくて、周りに馬鹿にされていました。体も小さくて、イジメの対象でした。その段階で支えるということがあれば、ああいうふうにはならなかったのではないか。子どもたちを大勢見てきましたが、

背景にはそういうものがあります。そのことを見ないで、外見だけで、こういうことをする奴は悪い奴だという見方は違うと思います。



(2) 差別との出会い

①『破戒』島崎藤村 モデルの人物

島崎藤村の『破戒』という小説を読まれた方がおられると思います。私も同じ長野県ということで、高校1年の時に読みました。被差別部落出身の瀬川丑松という教師が、自分が部落出身であるということをして子どもたちに授業をしていました。ある時、そのことが分かって、子どもたちの前で土下座をして、こんな卑しい人間が教師をやっている本当に申し訳なかったと涙ながらに謝る場面が出て来ます。それを読んだ時、私はこんな理不尽なことがあるのかと思いました。こんな馬鹿なことがあってたまるかと思ったのです。

その後しばらくして、この『破戒』の瀬川丑松にはモデルがいたということが分かりました。名前を大江磯吉と言います。長野県の私の住んでいた家から歩いて20分くらいのところに、その生家がありました。子どもの頃、こんな近いところに被差別部落の人たちがいたということも、差別を受けていたということも知りませんでした。差別に対して、同じ長野県の中でも、北部と南部ではかなり違うなあと思います、私は飯田ですから、南部です。そう言ったことに対して、割と寛容なんです。もともと被差別の方ですから、大江はお金があるわけじゃないのですけれども、周りの人たちが助け合って、学校に行かせます。彼は師範学校に行って教師になります。ただ34歳の時に病気で亡くなってしまいうんですけれども、今この人の生家の近くに石碑が建っています。彼は差別と闘って教師になりました。どんな差別があったかと言うと、その人が差別部落出身だということで、師範学校を出た段階で皆に知れ渡るんです。例えば、その人が旅行に行ったら泊まりますよね。そうすると、その旅館はダメだと言えなくて

泊めるのですけれども、泊めた後、不浄なものということで、畳を入れ替えるんです。こういう差別をずっと受けるわけです。彼はこういう差別のない社会を作るには教育だ、と言います。大江についての伝記がいくつか出されていて、私は後でそれを読みましたが、差別のない社会を作らなければいけないと思いました。

②朝鮮人への差別

中学校の時、私の兄のクラスに朝鮮の方がおりました。ずっといじめられていました。兄が言うには、朝鮮人というだけで、本当にいじめられていました。そういうことを聞いて、私は高校時代を過ごすわけですけれども、大学へ行ったら何を勉強しようかと考えた時に、差別のない社会、差別で苦しんでいる人たちを支えるような仕事に就きたいと思って、大学は法律を選びました。弁護士になろうと思ったんです。中央大学の法学部に入学した時、学園紛争の真っ最中でした。入学式も卒業式もありません。催涙ガスの匂いの立ち込める校舎で授業を受けました。神田カルチェ・ラタン闘争と言って、私が歩いていたら、機動隊と全学連がぶつかって、レンガだとかを割って投げつけ合う、それが目の前に飛んで来るわけです。そういうことを目撃しました。あの全学連だとか、社会を変えたいと言う全共闘の時代の人たちが、その後どのように生きて来たのか？ 間違いなく今の社会を作ったのは全共闘の人たちです。でも、「どうしてこんなことが起こっているの？」と思いますよね。もっと自由で平等の社会、もっと理想の社会を作れたはずじゃなかったか。あれがそもそも学生運動の発端ではなかったのか。でも、残念ながら、そうはなっていない。いろいろ考えさせられます。

(3)教師として生きて

①学校における差別

私は中学校の社会科の教師をしています



た。その後、障害があったり不登校の子どもたちを支えるような教師になりたいと思い、特殊学級の担任になりました。その校長から、これを読んでおくようにと言って、冊子を渡されました。それは特殊学級開設のしおりで、昭和 35 年に作ったものです。川崎市内で 4 番目に出来た特殊学級です。私は、その冊子を見て、驚きました。表紙に「特殊学級開設に向けて」と書かれていました。その下には「価値のない者へ愛を」と書かれていました。私が驚いたのは、こんなものが 20 年後まで保管されていて、新しく特殊学級の担任になった私に渡したということです。こんな校長がいるのかと思いました。おかしいと言うよりも、こんなものを残しておいたらマズイという危機感がない。中をパラパラと見たのですけれども、価値のない者に大慈の愛を、と書かれていました。大慈の愛というのは大きな慈しみの愛ということですよ。障害児教育ってそういうことなの？ 私は正直たまげました。障害の人たちは、学校の中ではこういうふうに見られているのだということが、よく分かりました。

②新設養護学校設立反対運動

私の最後の仕事は、川崎の北部にある麻生養護学校を立ち上げる初代の校長でした。2 つの高校が 1 つの高校になり、残った高校の跡地を養護学校にするということで作ったのです。その地域は、養護学校に対する反対運動がありました。教育委員会に「もう反対派は下火になっているから大丈夫だよ」と言われたのですけれども、行ってみたら、下火どころではありませんでした。1 年間は近くの高校に準備室を借りて、開校の作業をやっていたのですけれども、自治会、町内会が始まる度に呼ばれて、養護学校設立反対だと言われました。「養護学校を作ったら、犯罪者がこの近くにいっぱいいることになる。子どもたちが安心して暮らせない地域になる。こんなことやっていいのか？」と何度も詰め寄られ

ました。私は「障害者は犯罪しません」と言っただけですけども、なかなか理解してもらえませんでした。

これは県が決めたことですから、工事も始まって、やがて完成するのですけれども、完成した年の入学式に、びっくりすることが起きました。親も子どもたちも希望に燃えて、新しく出来た学校に174人の子どもたちが入って来る。受け入れる私たちは、その準備をしていたわけです。ところが入学式の当日、正門に大きな車がドンと停められていました。通せん坊です。入ろうと思っても、中に入れません。ここまでやるのかと思いました。川崎市は共生の町です。川崎市はヘイトスピーチがありますけれども、在日韓国・朝鮮人が大勢住んでいるところです。みんなで助け合って生きるということが、川崎市の方針になっています。これに対して、私が実際に見たのは、排除です。そのトラックを見た時、障害者の親は泣きました。自分たちの子どもがどこへ行っても差別され、排除されている。もちろん私も泣いたし、頭に來ました。その時、警察を呼ぼう、テレビ局を入れよう、と思いました。テレビでこういう差別の場面を見せて、社会に訴えていく。2度とこんなことができないようにするには、それが一番早いだろうと思いました。でも、実行するかどうか、10分くらい考えました。最終的にそうしませんでした。この学校が出来たら、地域の人たちとずっと末永く仲良くやっていかなければならない。最初の段階で決裂をしたら、その後の修正の方が難しくなる。私はそう思って、そういう手段はとりませんでした。トラックを停めた人がどこに住んでいるか分かりましたので、その家に行って、「車を動かしてくれないと警察が来ます」と言ったら、すぐどかしてくれました。保護者の流した涙を見た時に、私はもう退職して障害児教育とは関係ない世界に行くんだと思っていたのですけれども、そうは出来ないと本当に思いました。じゃあどうするか。いろいろなことを考

えました。

1つは、この地域社会をこの学校が変えていく。養護学校、障害のある子どもたちの学校が地域社会を変える。地域社会と闘うということです。学校の教育目標はいくつかあるのですけれども、2つ目は地域の差別と闘う学校だということです。こんなことを学校教育の中に謳うなんて、前代未聞のことです。私はこういう学校を作りました。

2つ目。なぜ障害者を差別するのか？ 差別するのは知らないからです。だったら、知ってもらおうように、地域の人たちに大勢養護学校に入ってもらおうということで、ボランティア養成講座を始めました。最初反対した地域ですから、人が来てくれるだろうか心配でした。そこで、最初に地域の教会に声をかけました。まぶね教会というのが、川崎の北部にあります。こういうところに声をかけて、ボランティアに来てくれないかという話をしました。そうしたら、最初50人くらい来てくれました。だんだん増えて、3年経ったら、300人来てくれるようになりました。今、10年経ちましたけれど、1,500人です。いろんな人たちが、入れ代わり立ち代わり来てくれます。最初、養護学校を作ることに反対していた町内会長が、「養護学校が出来てよかった」と言いました。「よかったって？ あなた反対したでしょう？」と言ったのですけれども、「反対したことは間違いだった。地域が温かくなった。障害者だけではなく、高齢者や外国人、いろんな人たちがいます。そういった人たちを包み込めるような環境を養護学校が作った」。その言葉を聞いた時、「勝った！」と思いました。長い年月をかけてやることは、いかに大事かということです。

養護学校を作った時、障害のある人が地域の人にケガをさせるという問題が起きました。私は地域の人たちに土下座して謝るということを1週間続けたのですけれども、なかなか許してくれない。ケガは大したことないのですけれども、どうしても許してくれなくて、

4か月間謹慎になりました。学校からいっさい地域に出ないということを約束させられました。これを私はやむを得ず受けましたけれども、地域の他の人たちがそこまでやるのはやり過ぎだと、いろいろ説得してくれたのですけれども、結局、4か月間一歩も外へ出ないということが続きました。これが小学校、中学校、高校だったらどうでしょうか？ 謹慎なんてないですよ。障害者だからあるのです。障害のある方たち、その保護者がどんなに苦労しているかということ、を、思わざるを得ません。



(4) 桜本教会の地域活動の中で

①ホームレス支援活動への反対運動

桜本教会は、ホームレスの支援活動を始めて24年になります。反対運動はすごかったです。最初の頃、川崎にホームレスは最盛期で1,500人くらいおりました。寿の方がホームレスという印象が強いですよね。でも数で言うと、川崎の方が圧倒的に多いです。その人たちを受け入れるということでやってきましたけれども、最盛期の頃は、教会は100人入れれば満杯で入りきれない。そうすると、2部制で外で待ってもらって、食事が終わると入れ替えて食事をするということできずとやってきました。ホームレスの人たちが駅から大挙して教会に来ます。大体30分くらい歩いて来るのですけれども、途中でいろいろな粗相をするわけです。それが許せないということで、地域の人たちが反対運動をします。「教会出て行け」。ずっとそういう状況で、どれだけ嫌がらせを受けたか分かりません。教会の前に猫の死骸が置いてあったりとか、ちょっとしたことで警察を呼んで、桜本教会に来るホームレスが、どこかで酒を飲んでいろんな状況を起こしているとか。それから、来る人たちの中でも、飲んだり暴れたりする人がいました。中には、刃物を持って来る人もいました。私は、子どもの頃からずっと柔道をやっていました。高校を卒業しても、柔

道で体を鍛えるということをしてきました。なぜかと言うと、この人たちが暴れた時に、私が止めなければならないと思ったからです。

この反対運動は、だんだん下火になって来ました。それは、いろいろやり方があったということです。1つは、私は元々中学校の教員でしたから、近くにある中学校に行って、そこで講演会をやらせてほしいと頼みました。夜、地域の教育会議というのがある、そこに地域の小学校、中学校の保護者が集まる。そういう会が年に2回ある。毎年、1回そこで話をさせてほしいと言って、3年くらい連続で話をしたのです。80人くらいの方がいて、そこでホームレスについてお話をするのですけれども、ホームレスについてだけではなく、障害、外国人、こう言った身近にある課題についても話しました。最後にホームレスの話をするのです。そういうことを繰り返すうちに、見方が少し変わって来ました。

もう1つは、ホームレスの人たちが、今までさんざん迷惑をかけて、迷惑をかける度に教会に苦情が来ました。「教会はもうこんなことできなくなるよ」と言って、皆さんに自制するようにお願いしました。そうしたら、もう暴れることは、なくなりました。ホームレスの人たちは、自分たちの中から、暴れる人はもう教会には来ないと、私が言う前に言うようになりました。

それから、もう一つは、ホームレスの人たちが教会の前を掃除するようになりました。教会の前に大通りがありますが、そこを端から端まで綺麗に掃除をします。雪の日は雪かきを、教会の前だけでなく、全部やります。そういう姿を見て、地域の人たちの教会に対する見方が変わって来ました。教会に対して、共感してくれるようになりました。衣類だとか食べ物、それから仕事まで出してくれるようになりました。24年かけて、このようになりました。簡単に人の差別感は直らないと思います。こういうことの中で、少しずつ変わって来たかなあと考えております。

②障害者、外国人への差別

障害者、外国人への差別、これも同じです。ヘイトスピーチを桜本でやるということがありました。そのようなことに対する教会での取り組みは、いろいろ出て来ます。

3 インクルージョンの概念

(1) インクルージョンの定義



①Inclusion

今日はインクルージョンという言葉だけを覚えて帰ってください。インクルージョンとは、「様々なニーズのある人々を包み込み、支え合う社会のあり方を指すもの」。これは理念です。インクルージョンの反対語はエクスクルーション（排除）です。排除しない社会をどう作るかということです。レジュメ1ページ下に「一人ひとりの違いを祝福し歓迎する価値観に基づいている」と書いてあります。人間は一人ひとり違って当たり前だということです。障害があろうとなかろうと、国籍がどこであろうと、肌の色がどうであろうと、そんなことは関係ない。こういう違いを認めて一緒にやっ払いこうというのがインクルージョンの考え方です。このインクルージョンの考え方は今、国連だとか、国際的に非常に大きな力を持ってきていて、教育の流れ、福祉の流れは今、こういう形になっています。

②Social Inclusion

インクルージョンは、その反対概念としてエクスクルーションがあります。それから、**Social Inclusion** という言葉があります。これは、障害者、高齢者、ホームレス、外国人が包み込まれる社会のあり方を指します。

③インクルーシブ教育

国連の出したインクルーシブ教育。これは障害、人種、性別、貧富等の理由で排除されない教育、万人のための教育と言われます。マララさんの国・パキスタンでは、女性が教育を受けることは許されていません。こんな

国が今時あるというのは驚きですね。宗教上、そういうふうに行っているところもあります。マララさんは、教育を受けたいと言ったからタリバンに頭を撃たれたわけです。マララさんの演説は、本当に感動ですよ。 「1人の子ども、1人の教師、1冊の本、そして1本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です」。私も本当にそう思うんです。

先ほど麻生養護学校のことでお話ししました。障害は知らないから差別するので、障害を知ってほしいということで、ボランティアを多く集めたと。もう一つやったことは、私が小学校、中学校、高校に行って、出前の授業をすること。障害理解教育ということで、子どもたちに障害を通して、人生って何だろうか、生きることの意味、社会はどうあったらよいかを考える授業をずっと続けて来ました。正門の前で通せん坊された親が泣いた姿を思ったら、やらざるを得ません。私は校長の1年目の時からそうですけれども、大学に移っても、それをずっと続けています。障害を考えながら、生きるってどういうことかを考えてもらうということを今も続けています。

◇神奈川の目ざすインクルーシブ教育

神奈川はインクルーシブ教育を教育の根幹に据えました。インクルーシブ教育というのは、障害があるということで排除しないで、出来るだけ障害の有無に関わらず、普通の子どもたちと一緒にやろうという教育です。今、養護学校、特別支援学級、こういったところに子どもたちが集中しているということを皆さんご存じでしょうか？ 神奈川県は、養護学校を作っても作っても追いつきません。

養護学校、今は特別支援学校と言います。それから、昔の特殊学級、今は特別支援学級と言います、それから、通級指導教育、これは普通の小学校、中学校の中であって、必要に応じて取り出しの授業をする。この3つの障害児教育の形態があるのですけれども、こ

こに集まる子どもたちが、10年前に比べて全国的に2倍になっています。神奈川県は2.5倍です。私が最初にいた麻生養護学校は、最初174人で始まったのですが、今350人です。何でこんなに障害児が増えるのか。何故だと思いませんか？ 私は長く神奈川県の教育委員会に勤めておりました。そこでいろいろな役職を持ちながら、障害児教育を進めて行くのですけれども、神奈川県議会の方々が私のところに来て、「鈴木さん、どうしてこんなに障害者が増えてるの？」と聞かれるわけです。この間も大きな全国大会があって、そこでお話したのですけれども、たまたま懇親会で隣にいた方は、有名な小児科医でした。この方は私が昔から付き合っている方です。「先生、今どうして障害者がこんなに増えているんですか？」と尋ねたら、「答えは簡単だよ。障害者が亡くならなくなったからだよ」。そのお医者さんは、子ども医療センターで長く医者をしていました。昔は1年で250人亡くなった。今は亡くなるのは1年に5～6人だと言っていました。

ダウン症の方で、心臓に病気を持っています。「手術して治した方がよいでしょうか？」と聞かれると、「はっきり言うけれども、ダウン症の方はそんなに長生きしないから、辛い手術なんかなくてもいいよ」。昔は障害のある人たちは早く亡くなるということで、そのお医者さんは、そう言ったそうです。ところが今、医療の体制、福祉の体制、栄養状態が良くなっていますので、長生きしているそうです。ダウン症の方で60歳過ぎた方いますよね。そういうことと、医療技術の進歩で、超未熟児と言われる人、つまり500g、600g、手のひらに乗る子どもたちが命を持って生まれて来る。これは医療技術の進歩です。そういう人たちが、結果的に重篤な障害を持っているということで、障害者が増えているのです。そのお医者さんに私は言いました。「でも先生、一番大きな理由は知的障害者が増えていることです」。このことをどう考える

かです。

1つははっきりしているのは、発達障害。発達障害の人たちは、知的にノーマルです。でも、例えばLD（学習障害）。読んだり書いたり、計算したりするところに一部落ち込みがあります。それからADHD（注意欠陥・多動性障害）。落ち着きがない、集中力がない、飛び跳ねる。こういう人たちがいます。それから、高機能自閉症と言って、自閉症の障害なのだけれども、知的にはノーマル。基本的に発達障害の人たちは、知的にはノーマルです。普通の障害児とはちょっと違うのです。こういう人たちが非常に増えて来て、その数が文科省の調査では6.5%です。障害のある人たちを全部均すと3%くらいですから、今は10人に1人が障害者という時代です。昔、私が障害児教育に取り組んだ頃は、100人に1人だったのです。結局、発達障害の人たちが、高等部で行き先がなくなって、養護学校にやって来る。だから、作っても作っても追いつかないのです。実は神奈川県はその影響を一番強く受けているところで、これから先も養護学校をどんどん作っていきます。作っただけでは追いつかないということで、高校の空き教室の中に分教室を作って、その中に入っています。その高校の数は、現在20校です。

こういう状況を改善するというので、今インクルーシブ教育を進めているところです。特に、高校の中にその受け皿を用意するというので、取り組んでいます。1つは、クリエイティブ・スクールということで、発達障害の子どもたちを集める学校。今、神奈川県に3つあります。もう一つは通級指導教室ということで、普段はそれぞれのクラスで授業をとっていますけれども、必要に応じて取り出して、その授業をする。そういう教室の形態もあります。それから、今考えているのは、知的障害の人たちを普通の高校に入れて行く。3つの高校に21人の知的障害者の人たちを入れる。これは今年からスタートします。こういうことをずっと続けて行って、やがて知

的障害があっても、高校で受けられるような制度に変えていこうということです。障害があつたら養護学校というふうに決まっていますけれども、実は養護学校には知的障害のない子どもたちも大勢来ています。こういう状況を変えて行く。つまり、小・中・高等学校の中に、そういう子どもたちを受け入れられるような仕組みを作ろう、ということで始まっています。今、障害とか発達障害とか、手のかかる子どもたちが1回レッテルを貼られると、特殊学級に行き、養護学校に来るという状況がずっと続いています。この状況を変えて行く。排除の実態ということでお話ししましたが、こういうものを変えていかなければいけないということになります。

(2) インクルーシブ教育の経緯と到達点

時間の都合で、①と②は省略します。

③特別なニーズ教育の要点

障害児と普通児との間に決定的な境界線は引けず、連続線上のものとして見ること。これはどういうことかと言うと、私たちは、健常と障害、このように2つに分けます。今でも私たちは2分法で考えるのですけれども、皆さんは健常ですよ。誰もがそう思います。でも、これから私が話すことの中で変わってきます。障害と健常の基準は何かと言うと、例えば知的障害。IQは70以下で、言語操作能力や知的操作能力のないこと。社会的な適応能力がないこと。この3つで知的障害を見るのです。

皆さんの中に、弱視の方いらっしゃいますか？ 私、盲学校の校長をやっていたのですが、盲学校には弱視の方が大勢おられます。弱視というのは、両目の矯正視力の合計が0.3未満の方を言います。それから難聴の方。60デシベル以上の方は難聴です。実は弱視にしても難聴にしても、いっぱいいるんです。例えば、弱視で言うと、出現率1.7%と言われています。1%の人たちは、盲学校に行ったり、あるいは普通の小学校や中学校の中にあ

る弱視学級に通います。でもそうではない0.7%の人たちは普通学級の中に入っています。軽度の弱視であったり、難聴であったりする人たちは、自分の障害を隠します。弱視で目が見えなければ、一番前に来ればいいのですが、それをしないのです。後ろの方にいるのです。後ろにいれば、授業を聞いていても分からないですよ。そうすると、不真面目だと言って先生に怒られる。障害をこんなふうに分けると言うことが、果たして正しいかどうか。ここに出て来たのが発達障害です。発達障害の人たちは、知的にノーマルですから、小学校、中学校、高校、大学まで行きます。会社にも勤めます。結婚もします。でも、その人たちは、そっくり障害の状況を持っています。LDというのは、読んだり書いたり計算したりすることが、一部どこかに故障があって、落ち込んでいます。トム・クルーズという俳優がいますね。彼は読字障害で、読んだり書いたりすることが、なかなかできない。彼は台本を読んで映画の練習をするということができません。耳から情報を入れてあげなければなりません。

発達障害の人たちが出て来たことで、こんなふうに一線を画して分けることができなくなりました。それで、今インクルージョンの世界では、人はすべて障害者です。障害とは何かと言う時に、障害とは誰かに自分のことを世話してもらって生活ができる、それを障害というふうに仮に言うとしたら、私たちは生まれた時、子どもの頃、障害者ですよ。死ぬ時も障害者です。では、その間だけ健常者？ 今、人の手に頼らないで生きているかと言うと、社会のお世話になり、人のお世話になって生きていますよね。

インクルージョンの世界では、人はすべて障害者です。先ほど自分は健常者だと言った人たちは、こういう考え方の中で、人に支えられて生きているということを自分で認めたら、障害者ということです。私自身の中にも具体的な障害があります。子どもの頃、吃音

でした。それから色弱。男の人は約 20%、女の人は約 4～5%とされています。色弱は、作られた障害と言われたりします。昔は色弱は医者や看護師になれませんでした。今、そういうことは一切関係ありません。小学校に入った時、色盲の検査がありました。今、小学校では一切検査しません。検査するのは差別です。今は障害に対する考え方が大きく変わりました。

もう一度言います。私たちは全員障害者です。自分が障害者であったら、こちらの人は健常者、こっちは障害者、あの人たちは自分とは違うよというふうにはならないですよ。それから、もう 1 つ言います。年をとると、高齢者と言います。年をとると、障害者になるのです。だから、障害者は自分とは全然別の存在ではありません。自分の中に障害性があるということです。こういうふうにインクルージョンは教えていきます。

時間がありませんので、ここからは少し飛ばしてお話します。

4 キリスト教におけるインクルージョン思想

キリスト教はインクルージョンについてどんなふう考えているのか？ ユダヤ教は選ばれし神の民ということで、自分たちは特別の存在だと言っていました。そういう中で、異邦人に対する差別意識は非常に強いのですけれども、本当にそれだけなの？ ということです。あるいは、障害者だとか、貧しい人たちに対して、聖書はどういうふうに語っているのか？ こう言ったところを少し考えてみたいと思います。

(1) 聖書におけるインクルージョンの系譜

①旧約聖書によるインクルージョン（支援を必要とする人々への対応）

・障害者、病人

こういう人たちに対して、レビ記の 21 章奉獻者の無欠損症ということで、障害者が排除されます。障害を持っていたら、献げ物を

するという役には就けない。こういう決まりがありました。私の桜本教会には障害を持っている人が大勢おられます。知的障害者もおられます。教会では、献金（私たちは献身と言います）の当番が袋を渡します。直接お金を入れるのではなく、ホームレスの人や貧しい人たちが大勢いますから、袋を渡して「お金のない人は気持ちを込めて献げてください。自分を献げるということで出してください」と言います。その当番の役を知的障害者がやります。知的障害者は、なかなかお祈りできません。ですから、いつも私が後ろに立って、読み上げるのです。献身の祈りは、次のようなものです。「献身のお祈り 天の神様 礼拝を皆さんと一緒に献げることができて、ありがとうございます。献身を心から献げます。困った時や苦しい時に、私たちを守ってください。このお祈りを主イエス・キリストのみ名によってお献げします」。私が出す一言一言を後追いでやってくれるのです。後追いでできない人もいます。障害が重ければ重いほど、お祈りは一言、二言です。「礼拝ありがとうございます。献身を献げます。これから守ってください。イエス様の名によって祈ります」。これだけです。でも、一緒にお祈りするということです。私の教会では、このレビ記に書いてあることと違うことをやっているのです。障害のある人、病人は献げ物をすることができないという決まりは旧約聖書です。



・盲人への配慮（申命記 21 章）

盲人の人たちに対して、どれだけ社会が配慮しなければいけないのかについて書かれています。ですから、旧約聖書はユダヤ教の時代で、障害者を排除するという考え方と、同時に障害者を包み込んでいくという両方の考え方があるということです。

・異邦人、貧困、無縁者

これは出エジプト記 22 章。異邦人、やもめ、孤児、貧者の権利ということを決

めています。こういう弱い人たちを守るとい
うことも、ユダヤ教の中では出来ていました。

②新約聖書におけるイエス・キリストのイ ンクルージョン思想

新約聖書におけるイエス・キリストのイン
クルージョン思想を見ると、もっとはっきり
します。よく聖書の中に出て来るファリサイ
派、律法学者との対立の中で、ファリサイ派
が、私はこんなものにならなくてよかったと
感謝して祈るところがありますね。あの記事
を正確に言うと、本当に罪人は神の前に出る
ことができない。後ろの方で胸をたたいて、
こんな罪人を赦してくださいと祈る。すると、
ファリサイ派の人々が献金をして、こんなも
のではなくて、私をこういうふうにしてくれ
てありがとうと感謝する。それをイエス様
が見て、「どちらが神に愛されるか」と尋ねる。
私たちはこの言葉だけで、キリストはどんな
方か、よく分かりますね。

・ヨハネの9章 生まれながらの盲人

当時は福祉の設備はありませんので、神殿
の前に座って物乞いするしかなかったのです。
その人を見て、弟子たちが通って行く。イエ
ス様はあとで後ろから行くわけですけれど、
弟子が「先生、この方が目が見えないのは、
誰が罪を犯したからなのですか。本人ですか、
それとも親ですか?」。これは障害の因果応報
説と言います。親が罪を犯したのが、子に報
いる。それに対してイエス様は何と言ったか
と言うと、「これは本人の罪でもない。親の罪
でもない」。そして「この人の上に、神の栄光
が現れるように」。こう言って、イエス様はそ
の人の目を開いたと書いてあります。盲人の
癒しの記事は「すべての人は神に救われるべ
き者だ」ということを端的に表しています。

・異邦人、(難民、移民をめぐる今日の問題)

異邦人の人たちに対して、差別感情だけ
ではなくて、その人たちを受け入れて一緒にや

っていこうという姿勢はイエス様の中に、至
るところに見えます。これが旧約聖書との違
いだと思います。

・初代教会における信徒の生活 (コイノ ニアの原義: ものを分かち合うこと)

初代の教会の人たちは、それぞれがものを
持ち寄って、必要に応じてそれを分かち合っ
たと書いてあります。あの分かち合うという
言葉の語源がコイノニアです。今、コイノ
ニアは何と訳されるかと言うと、「交わり」と訳
されます。随分違うなあという感じがします。
つまり、キリスト教が豊かな人たち、支配階
級の宗教になっている。交わりとか支え合う
という言葉に変わってきている。元々の意味
は「ものを分かち合う」。貧しい人たちに一緒
に生きられるようにということに使われてい
ます。それがだんだんこういう言葉に変わっ
ていったということの一つの形が見えます。

(2)日本におけるキリスト教の需要の課題

今、このままだと教会はどうなってしまう
のだろうか? 若い人たちが入って来ない。こ
ういふ問題ですね。私は本の中でフスト・ゴ
ンザレスという人の書物を取り上げましたけ
れど、「西洋、欧米、日本のキリスト教は死滅
した」と言っています。今、ヨーロッパやア
メリカで教会に行く人たちが、昔に比べて、
圧倒的に少なくなっています。私の行っ
ている大学にもアメリカ人がいるのですけれ
ども、「私は教会で毎週礼拝します」と言う
と、「まだあんな迷信信じているの?」と言わ
れます。日本語で「迷信」と言うんですよ。
そういうアメリカ人、ヨーロッパ人が増えて
いるということです。西洋的な合理主義と言
いますか、科学主義といった考え方の中で、
永遠の命だとか復活ということはなかなか信
じられない。パウロじゃないですけど、福音
の神秘の意味が分かっていないから、どう
しても人間の頭で理解することが難しく、迷
信になっている。アメリカでもヨーロッパでも、

キリスト教を信じる人たちの数がどんどん減っています。

一方で、増えているところがあります。それは、南米やアフリカです。つまり、キリスト教は、元々苦しくて貧しい人たちが信じる宗教だということです。今、ローマ法王は南米出身ですよ。これからは、そういうところの人たちが、かつて「地の果ての宣教」と言って、こんなところからクリスチャンが起ころうかと言われた人たちがキリスト教の中心になっていく。だから、豊かで知識のある人たちがキリスト教離れを起こしていくのは、ある意味では当然だと、フスト・ゴンザレスは言っているのです。逆に言えば、日本の教会が、何故数が少なくなったのかと言うと、キリスト教の受け入れということについて、西洋の理解と知識として受け止めて、信仰として受け止めて来なかったのではないか。このことが一番大きな問題ではないかと思えます。そういうことになれば、知識階級というのは裕福な人たちで、裕福な人たちは裕福でない人たちを切り捨てていく。こういうことが結果的に日本のキリスト教の衰退を起こしているのではないかという感じがします。



③キリスト教の言語理解

・知的障害者に信仰はあるか

これは、いろいろなところで言われます。私の教会には知的障害者がいっぱいいます。知的障害の人の話を聞くと、いろいろな教会の牧師が「知的障害の人に信仰が持てるわけがない」と言うそうです。何故か？ 信仰とは信じたものを口で告白して、初めて信者になれる。言葉を持たない人は、信者になれないということです。中世のヨーロッパでは、聾啞者は一切教会に入れてもらえませんでした。知的な障害があつて、しゃべれない人も教会に入れてもらえませんでした。言葉は特別なものだという思いが、キリスト教の神学の中にあります。言葉は動物と人間を分けるもの。

言葉があるということは、神から特別な恵みをもって神に近いものであることの証しだということです。

昔、バルトとブルーナーが神の像論争をやったことがあります。人間は神の像を持っている。これは聖書の中にも出て来る言葉です。その神の像とは何かということについて、ブルーナーは、言語能力だと言いました。人間は動物と違ってしゃべれるではないか。しゃべれるということが神から与えられた賜物だと考えたのです。バルトはそれを否定するのですが、ここではその話はしません。でも、実はこういう考え方がずっと残っていて、しゃべれない人は信仰が持てないと考えられています。

よく考えてみると、言葉には2通りあります。一つは、聞いて理解をする、いわゆる理解言語。理解言語というのは、しゃべれないけれども、誰かが言っている言葉を聞いて分かる。例えば、子どもだったら、1歳くらいになると、親のいうことがよく分かるようになる。でも、しゃべれないです。もう1つは、表出言語。しゃべる言葉。子どもは大体1歳半とか2歳くらいになると、しゃべるようになる。言葉は2通りあるのです。私たちはしゃべれる言葉を持っているかということにこだわるから、知的障害者は信仰が持てない、と言うのです。

私の教会にいる知的障害の人たちに信仰がないなんて、私はとても言えません。親が「夏休みに旅行に行くから教会を休みなさい」と言うと、「いやだ、教会に行く」と言います。教会に来ると、楽しくて楽しくて、ある知的障害の女性の方は、50歳くらいですけど、みんなにハイタッチしてくれます。おしゃべりはできませんし、聖書も読めませんが、喜んで教会に来ています。つまり、その人の居場所がある教会をどうやって作っていくか。障害は神の恵みかどうか、牧師たちが論争しているのですけれども、神の恵みと言える環境を教会が作っているかどうか。問わ

れるのはそこです。障害者そのものに問題があるわけではないのです。

チョムスキーという有名な言語学者がいます。彼は、人間の言語能力は、生まれつきみんな持っているということで、言語機能生来説とずっと言われてきたことです。人間は他の動物と違って、自分の中で言語能力を最初から持っているのだと。ところが、こういう考え方に対して、「いや、実は言葉は環境があって初めてそこで生まれて来るものだ。成長していくものだ」という考え方が今、強くなっています。キリスト教の言葉に対する悪い影響を受けた人たちが、結果的に、人間は他の動物とは違うということで、言語というものに対して非常に執着心を持ってきた結果がこういうことになったのではないかと。心理学者の中で、こういうことを言う人がいます。「心って、どうやって発生するんだろうか？」。乳幼児、生まれたばかりの子どもに、この子がどうやって心が出来て発生していくのか。それは、その人に関わる人が、この子はいずれこの言葉が分かる心は持っているんだ、そういうふうにする気持ちがあるんだ。そう言うんです。

私は養護学校に行って、よくそういう話をします。障害が重くて、話しかけてもなかなかレスポンスが出て来ない人たちにどう関わるか。必ず理解できると思いつつ語り続けることで、やがて分かるようになってくる。

最初から、「この人は分からないよ」と思ったら、子どもの成長そのものが、子どもの言葉そのものがなくなってしまう。信じる人がいるかどうか、養護学校の教員に一番求められていることです。



おわりに

今日はインクルージョンということでお話させていただきましたけれども、教会で取り組むべきこと、取り組めることがたくさんあるのではないかと思います。障害者が子どもの中で 10 人に 1 人、大人を入れると、大勢の障害者が身近にいるわけですが、そういう人たちが教会が受け入れられるようにならないだろうか？ 本当にそのことを思います。正直なところ、ホームレスや外国人の方を受け入れると、なかなか大変です。でも、私たちはやっています。そういう中で、ホームレスの人たちが教会の一員となって支えてくれています。私たちのホームレス支援は 24 年になりますけれども、洗礼を受けた方は 35 人になりました。我々のやっているのは宣教です。どんなに貧しくても、どんなに豊かであっても、キリストと出会うということがなければ、その人生は無意味です。社会には、教会にも来られない人がいます。その中で教会は何が出来かを一緒に考えていただくと、大変ありがたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

鈴木文治先生の著書

『インクルージョンをめざす教育—学校と社会の変革を見すえて—』

明石書店 2,808 円

『排除する学校—特別支援学校の児童生徒の急増が意味するもの—』

明石書店 2,376 円

『ホームレス障害者—彼らを路上に追いやるもの—』 日本評論社 1,944 円

『締め出さない学校—すべてのニーズを包摂する教育へ—』 日本評論社 1,944 円

『学校は変わる—切り捨てのない教育—』 青木書店 2,000 円

『幸いなるかな、悲しむ者』 キリスト新聞社出版事業部 1,983 円



鈴木先生は「知的障害者に信仰はある。これは神様から与えられた宣教の業です」とおっしゃって、林久見さんの詩とMさんの絵を紹介されました。この絵はMさんが入居されている重度の知的障害者施設の機関誌に掲載され、多くの人々の関心を引きました。

私は知っています

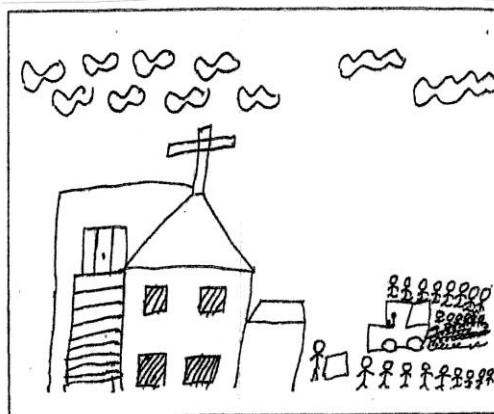
林 久見

私は体が不自由です
でも私は知っています
神のお力でいつか自由になれることを――
その日が来たら
私は大よろこびすることでしょう

私は生まれてから一度も歩いたことがありません
でも私は知っています
父母兄妹のあたたかい背中を――
その背に負われてどこへでも行かれます

私はものをいえません
でも私は知っています
悪口やきつい言葉をいわないですむことを――

私は知っています
かなしみや苦しみの中にも
よろこびやたのしみがあるということ――
その中で私は生きています



日曜日の桜本教会の風景（Mさん画）

名前

林 久見

私の名前は久見
父がマルコ伝にある
「タリタ・クミ」を取って
つけてくれました。
いつか天国の門を
くぐるとき
イエスさま御自身が
「タリタ・クミ」と言われましょう。
その時再び生き返り
自由な体になるのです
二千年前の女の子のように。



社会委員会からのお知らせ

★社会委員会の今年度の活動テーマの一つは、『現代の貧困について考える』です。
貧困の問題について、ご意見・ご要望がございましたら、社会委員へお知らせください。